

【よみがえる記憶～フラッシュバック】

自閉症の方々を「忘れられない人症候群」などと言ったりすることがある。

定型発達と呼ばれる私たちの多くが、それなりに毎日を屈託なく過ごしていけるのは、自分にとって嫌な気持ちを生じさせるような記憶を選択的に忘れ去ったり、都合よく改ざんしたりすることができるからで（脳が持っている本来の力、特に睡眠中に発揮されるらしい）、その意味では、全くのんきなものなのだが、一方自閉症の方々は、特に否定的な気持ちを生じさせるようなできごとほど、生の情動とともにしっかり記憶の倉庫にしまわれているようなのだ。そして、この「否定的な情動とともに記憶されたできごと」ほど人生を送るうえで大きな妨げになるものはない。

記憶は、否定的な感情とくっついているほど忘れにくくなる。「怖い」「辛い」「寂しい」「悲しい」「怒り」という感情が、「こっぴどく殴られた」「無理に注射をされた」「部屋にいつまでも閉じ込められた」「大声で何回も叱られた」というような行動とともに記憶の倉庫にしまわれる。そして、同じような状況が生じると本人の意思に関係なく突然想起し、想起されることでさらに忘れにくくなる。それが繰り返されうちに記憶は、一般的なエピソード記憶が保管される領域とは別の特別な脳の領域にしまい込まれるようになるらしい。そして、さらに忘れにくくなる。

A子さん、十年以上前に施設の囑託医だった医院の前をドライブで通るたびに、泣き叫びと自傷のパニックとなった。もう十年以上の月日が流れているというのに…。おそらく何人もの職員で抑え込まれて無理やりさせられた注射の記憶のフラッシュバックだった。彼女を乗せたドライブ、旅行、外出等、その道は通らないことに決めた。他の支援も相まって、その多くは構造化支援と意思決定支援だが、今ではその医院の前を通ってもパニック無し、注射は看護師一人で十分対応できる穏やかさである。

また、彼女、テレビを見ていて、そこにお医者さんの白衣が現れたり診察の場

面が現れるとパニックとなった。彼女の入所は、3才の時、母親の重い病気が原因である。幼い彼女は、母親のそばに行きたがったろう、が、おそらくその時に「お母さん、病気だから、近くに行っちゃだめだよ」と言われたのではないか？あるいは、入所する時には「お母さんの病気が治ったらお家に帰っておいで」と言われていたのではないか、そんなことを想像しながら彼女のパニックの相手をしたものだった。幸いに彼女はテレビを見たがらず、多くは料理や子猫や子犬のビデオを見たがったので、その対応は大事にはならなかったが、うっかりみんなで見ているテレビに病院の場面が出てきそうになると慌ててスイッチを切ったものだった。母の病気＝病院＝別れ＝見捨てられる…そんな記憶のフラッシュバックだったと思う。

一番彼女を苦しめたのは、食事のフラッシュバックだ。食事の前、食堂の配膳の準備がガチャガチャと聞こえるところから彼女のパニックが始まった。毎食、そして一年中だった。食べ始めてもパニックが止まらないこともあった。構造化、食事のタイミング、食事内容…、様々な支援が提供されたが、そのほとんどが無効だった。最後にたどり着いた支援は、食事＝母親と考え、幼少期の母との別れとその時の悲しさ、怒りの我慢のフラッシュバックを想定した方法だった。

母親に手紙を書いた。もちろん一人で書けないから、職員がO×カード、表情カードを駆使しての合作だ。「自分には自閉症の障がいがあること」「そのためにお母さんに多くの苦勞をかけてしまったこと」「できないことはいっぱいあるけれど、今は職員の応援を受けて自分らしい生活を送っていること」「だから、いろいろ細かいことを面会や帰省の時に言わないでほしいこと」そんな内容の手紙だったように思う。そんな手紙の行ったり来たり…、母親は必ず返事をくれた。母親が彼女の気持ちに寄り添う度合いが増すごとに、彼女の食堂でのパニックは少なくなっていくのだった。

母親の肯定的な承認が彼女のフラッシュバックを癒したのだった。